

イザヤ書 62 章 1-5 節

コリントの信徒への手紙一 12 章 1-11 節

ヨハネによる福音書 2 章 1-11 節

本日の旧約日課は、「イザヤ書」です。「イザヤ書」は、バビロン捕囚前からそのあと、そしてイスラエルの復興について語っていますが、本日の箇所は、特にエルサレムの復興について語っています。そこでは、エルサレムが、シオンとも呼ばれています。シオンは、地理的に言えばエルサレムの一部です。シオンという地名が最初に出て来るのは、サムエル記下 5 章 7 節ですが、そこには「**しかしダビデはシオンの要害を陥れた。これがダビデの町である**」とあります。シオンは、ダビデと最初から結び付けられている場所です。このシオンは、シオンの丘、あるいは山とも呼ばれますが、それは、その場所が少しだけ高くなっているからです。現在のエルサレムの旧市街、城壁で囲まれた地域の南側に、「シオン門」という場所がありますが、その近辺は少し高くなっており、神殿の丘とも呼ばれる地域です。ダビデの子であるソロモンがその場所に神殿を建てたからです。

神殿があった場所という意味から、シオンという地名は、エルサレムの中でも特別な意味を持ちます。その意味とは、主なる神様とイスラエルとの関係です。そしてその関係を、どのようにとらえるかが大切なのですが、イスラエルの一部の人々は、それを排他的にとらえてしまい、シオンは、シオニズムという考えの語源となってしまっています。

さて、なんども触れてきました事柄ですが、『聖書』が示す、主なる神様とイスラエルとの関係を確認しますと、その関係は、主なる神様がイスラエルを選び、愛したことから始まります。その理由は、イスラエルの民が特に優秀であるとか、特別な要素を持っているからではありません。むしろ、特に何も秀でたところがない小さい集団であるからこそ、主なる神様は選ばれたのです。それは、シオンという場所自体にも現れています。シオンは、「シオンの山」あるいは「神殿の丘」と呼ばれていますので、高い場所なのだろうと思いき、実際に行ってみると、どこなのか教えてもらわなければ気がつかないような場所です。そう感じるのは、わたしたちが高い山、あるいは高いビルや建造物に慣れているということもあります。しかし、イエス様の時代でも、イスラエル近辺には、ヘルモン山などの高い山や、丘の上に町もありました。それらを知っている人であれば、シオンは、大きさも高さもそれほどでもないと分かると思います。また、ユダヤ戦争でユダヤ人たちが籠城戦をした、マサダの方が際立った難攻不落の山です。シオンは、ダビデが攻め落としたエブス人の要塞があったともいわれます。つまり、人間が到達できないよう

な場所や、難攻不落の場所というようなものではないのです。そのような場所が、主なる神様とイスラエルと関係の象徴なのです。

さて、それらのこととは別に、シオン、そしてエルサレムは、「彼女」とも呼ばれています。それは、都市や地名を女性として考えているからです。また主なる神様とイスラエルとの関係は、男女の結婚にたとえられています。本日の「イザヤ書」62章4節には、「あなたは再び『捨てられた女』と呼ばれることなく、あなたの土地は再び『荒廃』と呼ばれることはない。あなたは『望まれるもの』と呼ばれ、あなたの土地は『夫を持つもの』と呼ばれる。主があなたを望まれ、あなたの土地は夫を得るからである」とあります。これらの表現は、文化も時代も違いますので、そのまま普遍的な事柄として、今日に当てはめることはできません。特に、結婚を男女の事柄としてのみ表現することや、結婚という概念が、一つの不可欠な価値観と考えることは、今日、避けなければならないと思います。しかし、『聖書』が、ここで示そうとしている事柄は、主なる神様とイスラエルとの関係、言い換えれば主なる神様と人間との関係は、詳細を説明することはできないけれども、なんとなく結婚を一つの例とすると、なんとなくわかる人にはわかりやすいでしょうということです。

さて、そのような主なる神様とイスラエルの関係ですが、その中で大切なことは、イスラエルが、自分たちの力、すなわち人間の知恵や武力に頼るのではなく、主なる神様の言葉、知恵、律法によって歩むことです。そして主なる神様はそのようなイスラエルを、必要ならば直接助ける、あるいはほかの民族を用いて守る、あるいは人間には奇跡とも思えるような出来事を通して、そして、時には、主なる神様が特別に遣わすメシアを通して、イスラエルを救うということです。

この中のメシアにも、イスラエルの人々は、次第に自分たちの様々な期待を、かけてしまうのですが、わたしたちにとっての、メシアは、イエス様です。そしてイエス様の登場が、そのメシアの概念を大きく変えたのです。

さて、今日の福音書は、メシアであるイエス様の、「ヨハネによる福音書」における最初の奇跡です。先に見たシオンの救いに関する壮大なお話とは、少し趣が異なります。「カナの婚礼」とも呼ばれる物語ですが、大変に不思議な物語です。一節一節を細かく見ていくと面白いのですが、ここでは大筋だけにとどめます。物語の大筋は、イエス様と母マリアは、ある結婚式に招かれたが途中でぶどう酒が足りなくなり、イエス様がかめに汲んだ水をぶどう酒に変えたという奇跡です。

イスラエルの結婚式は、何日にも及ぶ場合がありますが、親しい人だけを招き、通常は料理もお酒も余るほど用意するので、それらが足りなくなることはありません。お酒が足りなくなるというのは、通常はあり得ない状況です。また、そのことを結婚式の参列者の一人である、母マリアが、同じ参列

者の一人である子のイエス様に「ぶどう酒がなくなりました」(ヨハネ 2:1) 告げたという描写は、読み方によっては、結婚式の主催者への、軽い悪口ともとれます。また最後にある世話役の言葉、「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったころに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました」(ヨハネ 2:10) というのは、少しずるい考えが前提となっています。意外なときよい酒が出たと、参列者が皮肉を込めて、喜んだようにもとれてしまいます。

最後は、「イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた」(ヨハネ 2:11) と締めくくられています。弟子たちは弟子たちで、水がぶどう酒に変わったことを見て信じたのかとも、うけとれてしまいます。結婚式自体がどのような形で終わったのかは告げられませんが、この弟子たちの反応から推測すると、イエス様によって結婚式は無事に終わったのでしょう。結婚という新しい旅立ちの一步を始めた新郎新婦も傷つくことなく、主催者も恥をかくこともなく、そして、集まった人々も、楽しく結婚式を終えたのだと思います。

さて、「ヨハネによる福音書」は、この最初の奇跡物語で何を伝えようとしているのでしょうか、それはメシア像の大きな変化です。

カナの婚礼、結婚式での奇跡の出来事とは、招いた人数から必要数を予想して、準備していたぶどう酒が、なぜか足りなくなり、イエス様が水をぶどう酒に変えて補ってくださったという不思議な出来事です。この出来事は、先に触れたシオン全体、あるいはイスラエル全体の回復という事柄と比較しますと、個人的な事柄であり、また規模が小さい事柄といえます。しかし、「ヨハネによる福音書」は、それがイエス様の、メシアとして行った最初の奇跡ですと告げているのです。

また、このカナの婚礼での出来事は、イスラエルの事柄と離れて考えたとしても、世界中で起きている、様々な政治的、軍事的、経済的出来事と比べると、何とも小さな出来事に他なりません。しかし、それがイエス様のメシアとしての最初の奇跡なのです。そのような物質を変化させる力があるなら、その力を、今世界に存在する飢えの問題に用いた方が良いとか、あるいは神に敵対するものの殲滅に用いた方が良いとか考えてしまいます。事実、イスラエルの人々が期待したメシアは、敵と戦ってくれる存在であったと思います。しかし、「ヨハネによる福音書」は、新しいメシアの最初の奇跡を、水をぶどう酒に変えて、結婚式を問題なく継続させるという、ある意味、ほのぼのとした出来事として描いているのです。

その理由はなんのでしょうか。そのこと自体は明記されていませんので、推測するしかありませんが、確かなことは、もしイエス様が、そこでそのような力を発揮しなかったら、せつかくの結婚式が台無しになってしまったということです。そこまでいかなくても、何となく雰囲気が悪くなり、せつかく

の二人の門出が少し暗くなってしまったということです。

そんなことぐらい、世界平和の問題に比べればなんだ、世界の経済的格差や飢えの問題に比べれば、それぐらいのことに何の意味があると考えてしまいますが、それぐらいのことと、そのように人間が思うことを、決して軽んじない、それが主なる神様のもとめる平和なのです。主なる神様がイエス様を通して示そうとしている平和なのです。そしてその平和な出来事の中に主なる神様の栄光、イエス様の栄光が現れたのです。だからこそ、「**イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた**」(ヨハネ 2:11) と、そのイエス様を信じたことが結論となっているのです。水がぶどう酒に変わったことではないのです。たしかに、その奇跡の目撃者であるから弟子たちは信じたように思えますが、「ヨハネによる福音書」が伝えたいことは、見ることでできた奇跡が示す、主なる神様の栄光、イエス様の栄光です。小さい事柄を決して見逃さない主なる神様の栄光です。

新しい年が始まり3週目となりました。本日の礼拝後は、新旧合同の教会委員会があり、来月は堅信受領者総会があります。昨日は、98年のご生涯を終えた一人の姉妹を天国にお送りいたしました。すでに様々なことが始まっていますが、本日のコリントの信徒への手紙は、教会に集められた人々の、それぞれの霊の賜物について記しています。わたしたちの東京聖三一教会に集まる皆様には、本当に一人ひとり沢山の賜物が神様から与えられていると思います。昨日、天国にお送りした姉妹も、本当に教会で様々な賜物を用いてくださった方でした。

本日の「イザヤ書」と「ヨハネによる福音書」が示す事柄は、わたしたちが信じている主なる神様は、壮大な方であると同時に、またわたしたち一人一人の小さなことを見逃さない方であるということです。そして、わたしたちは、その主なる神様を、教会を通して信じて歩むのです。そして、その歩みの中で、わたしたちが主なる神様から与えられた賜物を生かすのです。わたしたちが神様から頂いた賜物は、当然それぞれ異なります。しかし、それらを、一つひとつに用いるとき、イエス様の最初のしるしのような奇跡へつながると思います。そしてそれらの奇跡は、世界の問題を一気に解決することはできないかもしれませんが、世界とわたしたちをよりよい方向と導くことは確かだと思えます。

わたしたちの教会は、東京教区の中で、歴史、壮大さもある教会です。それはそれだけ責任がある教会だということです。その教会全体の責任は、一人ひとりが主なる神様から与えられた賜物を生かすことによって、達成されます。そのことを大切なこととしてとらえ、この一年も過ごしたいと思えます。